

試験研究成果普及情報

部門	野菜	対象	普及
課題名：北海道の輪換畑を利用したイチゴリレー苗の生産技術			
5．北海道で生産された苗の促成栽培における生育・収量特性			
<p>[要約] リレー苗は、苗の大きさで初期収量が異なるため、定植の段階で展開葉数によって分別する。収量は、年内には慣行のポット苗より少ないものの、1月以降には連続的に収穫でき、中休みの発生は極めて少ない。リレー苗とポット苗を組み合わせることにより、収穫期間を通じて大玉果が安定的に得られる。「とちおとめ」の展開葉数2枚以下の小苗は、頂花房を3花に摘花して、その後の連続的な大玉果生産に努める。</p>			
キーワード（専門区分）栽培		（研究対象）野菜類 - イチゴ	
（フリーワード）イチゴ、育苗、省力、輪換畑、北海道、収量			
<p>実施機関名（主査）農業総合研究センター生産技術部野菜研究室 （協力機関）農業総合研究センター イチゴリレー苗プロジェクトチーム、 安房農業改良普及センター、安房いちご苗委託組合、 北海道空知南東部地区農業改良普及センター （実施期間）2001年度～2003年度</p>			

[目的及び背景]

土壌病害の発生がみられず、省力的なイチゴ育苗が可能な北海道の輪換畑において育成されたリレー苗の、本県での収量性及び効率的利用法を検討する。

[成果内容]

- 1．輸送されてくるリレー苗の大きさ別の割合は、年や増殖受託圃場によって異なるものの、一例としては表1のようになる。大きさによって初期収量が異なるため、定植の段階でリレー苗を展開葉数によって分別する（図1）。
- 2．収量の推移は、年内には慣行のポット苗より少ないものの、1月以降には連続的に安定した生産を期待できる。リレー苗は、頂花房に続いて、第一次腋花房が、さらに第二次腋花房が遅延することなく発達し、中休みの発生は極めて少ない（図2）。また、収穫期間を積算した総収量は、リレー苗とポット苗の間に差はみられない（図3）。
- 3．リレー苗とポット苗を組み合わせることにより、収穫期間を通じて大玉果が安定的に得られる。リレー苗とポット苗を1：1に組み合わせたときの大玉果収量の推移は、上下の波が小さく、ばらつきが少ない（図2破線）。
- 4．「とちおとめ」の展開葉数2枚以下の小苗は、生育、収量推移が展開葉数3枚以上の苗と大きく異なるので（図3）、初期の着果負担を軽減するために、頂花房を3花に摘花して、その後の連続的な大玉果生産に努める（図4）。

[留意事項]

- 1．ランナー切断などの調製をしながらの定植には、労働力2名で1日当たり3,000株程度が目安となる。
- 2．定植から2週間は、活着の促進を図るため遮光率20%ほどの白寒冷紗などで遮光するとともに、こまめなかん水に努める。

[普及対象地域]

県下全域のイチゴ生産者

[行政上の措置]

[普及状況]

安房、山武地域を中心に普及し、平成16年度には、約37万株が配布されている。

[成果の概要]

表1 定植時のリレー苗の生育状況と発生割合

品種	区分	展開葉数 (枚)	草丈 (cm)	発生割合 (%)	花芽分化状況
とちおとめ	大苗	6.2	18.5	27	× ×
	中苗	3.5	16.0	53	× × ×
	小苗	1.9	9.8	20	× × × × ×
女 峰	大苗	5.6	22.5	10	× × ×
	中苗	3.0	18.3	58	× × × ×
	小苗	1.5	7.5	33	× × ×

注1) 花芽分化状況は、×：未分化 ◯：分化初期 △：分化期とした。
 2) 苗の大きさ別発生割合は、年や増殖受託者によって大きく異なる。

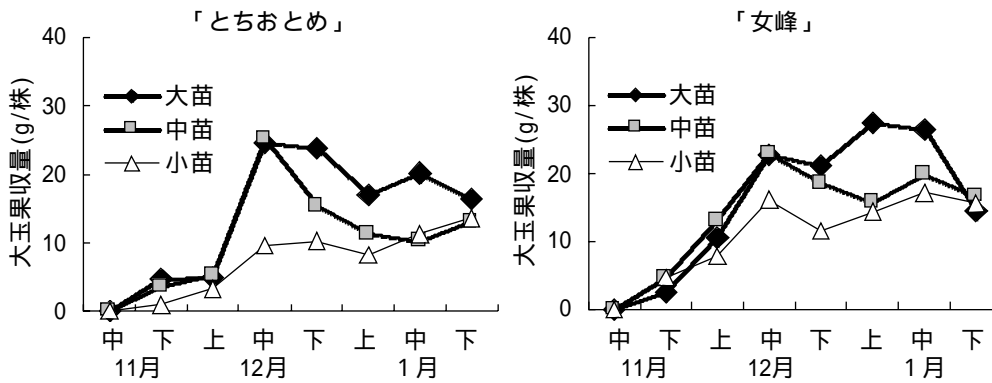


図1 大きさの異なるリレー苗の大玉果²初期収量

² 18g以上の果実を大玉果とした。

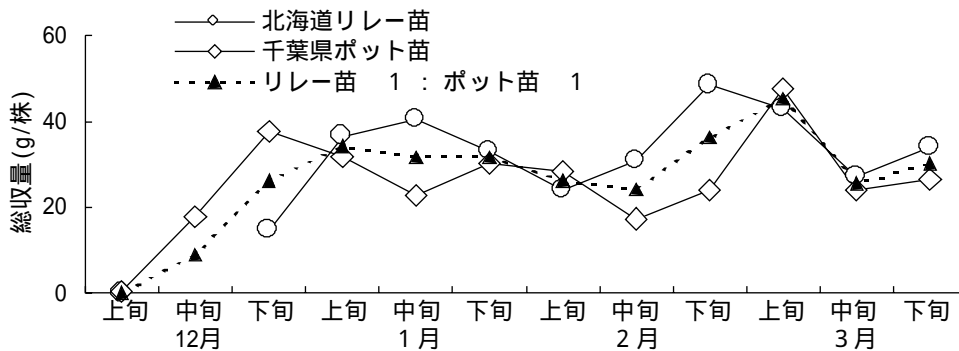


図2 定植時の大きさが異なるリレー苗およびポット苗の大玉果収量²の推移

² 18g以上の果実を大玉果とした。

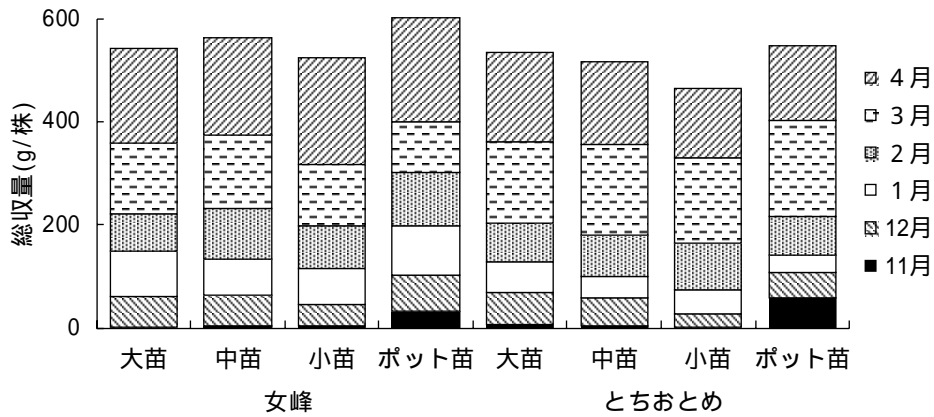


図3 定植時の大きさが異なるリレー苗およびポット苗の総収量

^z 展開葉数5枚以上を大苗、3~4枚を中苗、1~2枚を小苗とした。

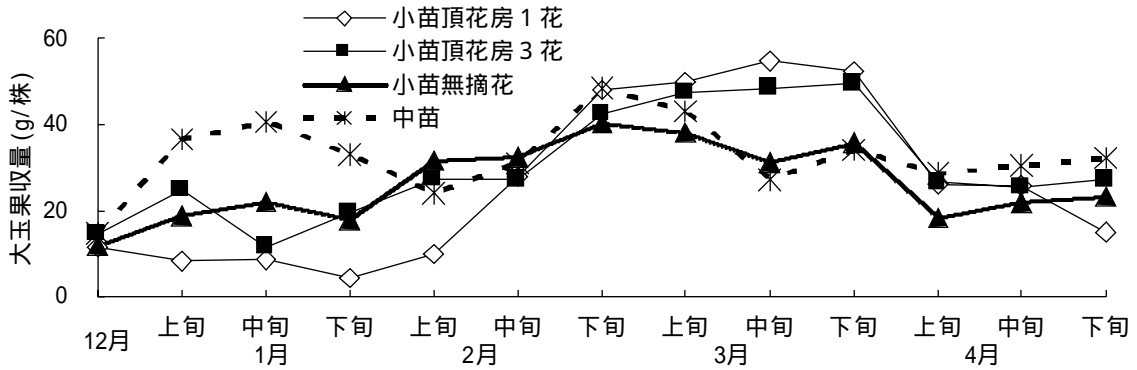


図4 摘花程度が異なるイチゴリレー苗の大玉果収量^zの推移(「とちおとめ」)

^z 18g以上の果実を大玉果とした。

[発表及び関連文献]

園芸学会平成15年度春季大会

[その他]

平成12年度試験研究要望課題(提起機関: 安房農業改良普及センター)

緊急技術開発促進事業「課題名: 北海道におけるイチゴリレー苗の生産技術の確立」